
NANASE

橘 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N A N A S E

【Nコード】

N 8 6 3 3 I

【作者名】

橘 明

【あらすじ】

恋の三角関係。ライバルは幼馴染みの美少女七瀬。

思い出すのは10年前。

保育園の頃。

はじめて七瀬に会った。

七瀬は薄いピンクのブラウスに、紺のスカートをはいて、薄茶色の髪を三つ編みにしていた。

色が白くて、目が大きくて

なんだか、マンガの中から抜け出して来たみたいな女の子になって

お友達になりたいなって

その時は、思っただけと……。

#1 天使とすみれ 01 (前書き)

本作は以前一度ここに投稿したのですが、文体を変えて再度投稿します。よろしく

#1 天使とすみれ 01

紫色の小さな花をみつけた。

小さなかわいい花。

なんて花だっけ？

思い出せない。

すぐそばに咲いてる、

華やかなしゃくなげの花の名前は思い出せるのに……。

なんかくやしい。

絶対に思い出してやる。

私……相沢麻由香は、じっとその花を見つめた。

と、

「相沢？」

ふいに声をかけられる。

振り返ると、

藤井。

藤井一希。

この春、出会ったばかりのクラスメート。

そんだけのつきあいだけど。

「なにやってるんだ？　今頃、こんなところで」

「花、見てるの」

「はあ？」

「これ、かわいいでしょ？」

「なんの花？」

「わかんない。だから、思い出したくて」

「好きなの？」

「別に……名前を思い出そうとしていただけ」

「バカだな、遅刻するぞ」

そういうと、藤井は私の腕をつかんでひっぱり

「走ろう！」

と、私の手をひいたまま走り出した。

教室に入ると、始業3分前。

慌ただしく自分の席につき教科書を並べる。

すぐにチャイムが鳴り、担任の松岡先生が入ってきて、出席をとりはじめる。

「いえー、しよれではあ出席をとりましう……」

そのおかしな発音に女生徒達がクスクスと笑い声を上げる。

でも、松岡先生はあくまでも機械的に「赤松君、新井君……」と、出席をとる。

ある意味立派。

「新見君……野口君……藤井君」

藤井の名前が呼ばれた。

名前を聞くだけで嬉しくなる。

入学式の日には彼と出会ってから、私はずっと、幸せな春の気分。

人を好きになる事が、こんなに楽しい事だとは思わなかった。

まるで世界が違って見える。

灰色の教室さえ、鮮やかに色染められるみたい。

……が、

「春日……春日七瀬は、いましえんか？」

その名を聞いたとたんに、憂鬱になる。

そして、一番後ろの窓際席を見た。

誰もいないその席には、鞆だけがちょこんとのってる。

鞆があるって事は、一応、七瀬は来てるんだ。

「どこに行ったか、誰か知りましえんか？」

松岡先生の質問に、出席番号8番、葛谷高志が足を挙げて答えた。

「春日さんなら、朝早く、町田と小林に呼び出されてました〜！」

それを聞いて、松岡先生は寝ぼけているような目を、町田の方に向けた。

「町田さん、小林さん、春日さんがどこに行ったかしりましえんか？」

「知りません！私達貸したものを返してもらっただけです！すぐ別れたもんねえ、ユキ」

町田綾美は、むくれたようにそう言つと、顔をぶいっと逸らした。

「春日さんの事だから、またさぼってるんじゃないですか？協調性ないし」

小林ユキが、町田の味方をする。

「よく言うよ。いじめじゃねえの？」

葛谷がいった。

「いじめじゃねーよ」

小林が怒る。

「どうだか？お前ら春日つぶす相談してたじゃん」

「してねーよ！」

クラスメート達が、2人のやりとりをおもしろがって騒ぎ始めた。

同時に、体が震えてくる。

……ただよ、七瀬。中学の時と同じパターン。もう、カンベンしてよ、七瀬……！

やがて、クラスのざわめきがおさまる頃、さんざん迷った挙げ句、覚悟を決めてずっと右手を上げた。

「先生、私が春日さんを捜して来ます」

クラス中が、あっけにとられて私に注目した。

町田と小林が睨んでいる。

葛谷は面白そうにニヤニヤしている。

私は、恐さと恥ずかしさでこの場から消えなくなった。

松岡先生が言った。

「君は、副委員長の相沢さん……でしゅね」

「はい。春日さんは、私の友達ですから……」

「そうでしゅか。では、お願いします」

松岡先生が、無感動にうなずいた。

斜前の席から、藤井が怒ったような目でこちらを見ていた。

#1 天使とすみれ 01 (後書き)

すみません；

コピペミスしたので直しました

#1 天使とすみれ 02

旧校舎の非常階段の下で、私はようやく七瀬を見つけた。

近寄ってみると、頭と肩が真白に汚れている。

なんだか、まるで羽をもがれた天使みたい。

「七瀬…」

走り寄って声をかけると、七瀬がこっちを見た。

大きな二重の目の下に、赤い痣ができている。

良く見ると、ふくらはぎからひざにかけても、小さな痣ができてる。

頭と肩が白く見えたのは、チョークの粉のせいだった。

私は黙って、七瀬の体から白い粉を払ってあげた。

「小林さんと町田さんにやられたの？」

「うん。他にも3人ぐらい居たけど…他のクラスの子だったから名前知らない」

「許せない！ いじめてないって言ってたよあいつら！」

「マユが怒る事ないよ」

「でも、腹立つじゃん！」

「そう？ 別に」

七瀬はいつもこう。

いじめられても平気な顔してる。

痛みを知らないみたい。

いつだって、私の方がやきもきしている。

「で、何が原因なの？」

「最初に、小林が『髪の毛を、真っ黒に染めて来い』って言ったの」

「なんで黒くしなきゃいけないの？」

「知らない」

七瀬はそう言うと、人ごとみたいに空を見上げた。

私は、七瀬の薄茶色の髪を見た。

七瀬の髪は天然のプラチナベージュ。

それは、彼女のDNAに組み込まれた色素の薄さを示す。

だから、七瀬の肌は雪のように白く、唇は淡いピンク。

「それで、七瀬はなんて答えたの？」

「なんで、あんたらにそんな命令されなきゃいけないのよ！ 言いたい事が有るなら、つるまずに一人で来いよ！ このヘタレ！……つて。その後、小林の顔を2、3発殴ってやったら、仕返しに全員からボコられた」

「はー。あきれる。そんなんだから、七瀬はマトにされるのよ……」

「勝手にすれば？　って感じ」

「でも、損だよ。七瀬本当はいい子なのに……」

「なにそれ？　失笑」

「……もう、いいから、教室にもどろっ」

「もどらない」

「どうして？」

「用事思い出したから、今日は帰る」

「待つてよ！」

私は七瀬を追いかけた。

「教室に帰ろっよ！」

「冗談……！　こんな顔で」

「小林さんに殴られたって言えばいいじゃない。イジメがあるって証拠になるよ！」

「春日さんの方が先に手を出したので、仕返ししました…小林がそう言ったら、イジメだなんて信じてもらえっこないもん」

「…もういいよ。分かったよ」

七瀬には、何を言っただって無駄。

10年以上の付き合いで思い知らされている。

…でも…

七瀬、知ってるの？

中学時代からこんな事があるたびに、私がどれだけ苦労して七瀬のフォローをしているのか。

遠ざかる七瀬の後ろ姿を見ながら、溜め息をつく。

私、どうして、私は七瀬と友達なんてやってるのかな？

#1 天使とすみれ 03

「春日さんはみつかしましえんでしたか？」

教室に戻ると、松岡先生が聞いてきた。

「春日さんは、帰りました……怪我を……」

「怪我？ 一体どうして？」

言葉につまる。

『イジメだつて言つても、絶対に信じてもらえないよ』

つて、七瀬の言葉がよみがえってきたから。

でもどうしよう？

嘘はつけない。

その時、小林ユキと目があつた。

凄い目でにらんでいる。

『黙つてろ』

つてことかな？

でも…

悪いのはあんた達じゃないの？

そう思ったら、少し勇気が出て来た。

「先生……春日さんは……！」

本当の事を言おうとした時……

「先生、背広に洗濯札がついてまーす」

町田綾美が手を挙げた。

嘘ばかり。

あんな位置から先生の背中が見えるわけないし、

現に、洗濯札なんかついてないこと、ここから分かるもん。

町田綾美は小林ユキの親友。

当然、七瀬の事も嫌ってる。

だからきつと、私がほんとのこと言わないように邪魔したんだ。

松岡先生は、慌てて背広をぬいで、襟の部分を確認しはじめた。

でも、当然何もついていない。

それを見て思った。

『ダメ。こんな人、あてにならない……』

くすくすと誰かが笑った。

自分が笑われてるみたい。

もういや！

逃げ出したい。

でも、そう思えば思うほど、パニックって動けなくなる。

さらに追い打ちをかけるみたいに葛谷高志が言った。

「みんな、静かにしろよー！ 相沢さんが発言中だろ！？」

それで、みんなが私を見る。

ますますパニックになる。

葛谷はこっちを見てニヤニヤしている。

そして、言った。

「相沢さん、なんで、春日さんは怪我をしたんですか？ 本当の事を教えてください」

わざとらしい敬語！

明らかにこの状況をおもしろがってない？

私に何の恨みがあるの？

と、その時

「もう、やめろよ！」

藤井が、助けてくれた。

「相沢、困ってるじゃないか？ これこそ、イジメだよ！」

「イジメ？ 俺が相沢さんをいじめたっていうの？」

「じゃなきゃなんだよ？」

「いいの、藤井君！」

私は叫んだ。

「もういい」

一刻も早く、ここから逃げたい。

それで、私は嘘をついた。

「春日さんは、階段から落ちて怪我をしたの。それだけなの……」

#1 天使とすみれ 04

『ごめん。マユ。帰る時、鞆、置いて来ちゃった。悪いけど持って来てくれない?』

七瀬からのメール。

あきれる。

なんで私が持つてかなくちゃいけないの／

と、思いつつ

淡々と七瀬の鞆に荷物を詰めてく……お弁当箱と、紺色のポーチ。それに小さな鏡。

それだけ。

何しに学校に来てるの? って思う。

パチン……

鞆の留め金をとめる。

と、

「相沢さん」

よびかけられたので、上を向く。

頭の上で。葛谷が笑ってる。

「葛谷……くん？」

「そう。葛谷。名前おぼえててくれた？」

「うん。目立つもん。でも、何？」

正直、あんまり話したくない。

「春日さんて、本当に階段から落ちたの？」

なんだ、そのこと。

「ええ。そうよ」

私は、きつぱりうなずいた。

「本当かなあ？」

葛谷は疑ってる。

「それにしても、朝迷ってなかった？」

「あれは、緊張してたから。私って、小心者だから……」

「ふん」

葛谷は、口をすぼめて何度もうなずいた。

信じてないみたい。

「でも、なんで、葛谷君がそんな事気にするの？」

しまった……話題をふってしまった！

心の中で後悔する。

でも、もう遅い。

「なんでって……春日さんで、一部の女に目をつけられてるみたいだし。俺はイジメじゃねーかって……」

やっぱり疑ってたみたいだ。

でも、いまさら本当の事言いたくない。

だから、また嘘をついた。

「でも、七瀬は階段から落ちたって言ってたよ」

「本当に？」

「そんなに気になるなら直接本人に聞いたら？
携帯の番号教えてあげるよ」

「いや、そこまでしてもらわなくていいけど」

「じゃ、もう忘れれば？ 私帰りたいし」

「あ、ちょっと待ってよ」

「ごめん。急いであるから」

「……分かったよ。さよなら……」

葛谷は諦めたようだ。

私は、両手に二つの鞆を持ち、廊下に出てホッと一息ついた。

#1 天使とすみれ 05

学校から出て、坂道をおりてくとちゅうで、

偶然、藤井に会った。

両手に荷物を持ってる私を見てあきれてる。

「なに？ そのカバン？」

「うん？ かたっぱ七瀬の」

「荷物持ち、やらされてるの？」

「しかたないよ。七瀬は他に頼れる子いないし」

「まあ、あの性格じゃなあ……」

「あれで、いいとも、あるんだよ……多分」

「多分って、なに？」

「いま、どこがいいところだったって考えちゃったから」

そう言うと、藤井が吹き出した。

そして、右手を差しだし、

「持つよ、それ、どっちか……」

と言ってくれる。

「え？ ホントに？ 頼んでいいの？」

「いいよ。ほら」

「じゃ。こっち。七瀬の」

七瀬のカバンを差し出すと、藤井はそれを黙って受け取り、さつさと歩きはじめた。

「待ってよ」

小走りで、藤井を追いかけ。

しばらく、そんな風に藤井を、追いかけているうちに、十字路にさしかかった。

「藤井君、もういいよ。もうすぐ、家でしょ？」

そう。

藤井の家は、このレンガの家のすぐ近所。

すると、藤井が立ち止まって、こちらを見た。

「さよなら」

とでも言うのかと思ったら、

「相沢、もうやめろよな、ああいう事」

… 全く思いもよらない言葉。

「ああいう事って？ 何？」

「朝みたいな事だよ」

「七瀬を探しに行ったこと？」

「そう。それ」

「いいよ、私、結構なれてるもん。中学の時からしょっちゅうだっ
たし」

「中学の時から？」

藤井が、びつくりする。

「相沢、正義の味方志望？」

「違うよ」

苦笑い。

「一応、友達だし」

でも、なんで、私、七瀬なんかと友達やってるんだろう？

#1 天使とすみれ 06

思い出すのは10年前。

保育園の頃。

はじめて七瀬に会った。

七瀬は薄いピンクのブラウスに、紺のスカートをはいて、薄茶色の髪を三つ編みにしていた。

色が白くて、目が大きくて

なんだか、マンガの中から抜け出して来たみたいな女の子になって

お友達になりたいなって

その時は、思っただけど……。

#1 天使とすみれ 07

ピンポン。

チャイムを押す。

誰もでて来ない。

カーテン閉まつてるし、帰ってないのかな？

「七瀬、七瀬」

2階の七瀬の部屋に向かって呼びかけるけど返事がない。

帰ってないんだ。

七瀬は一人暮らしたから、制限もないし、しかる人もいない。

だから、最近夜まで遊んでるっていったっけ。

ある意味うらやましいけどなんか、寂しい。

おばさんがいればな。

って、4年前出ていった、七瀬のお母さんの事を思い出す。

日が暮れて、寒くなって来たから

玄関の扉の前に七瀬の鞆を置いて帰ることにした。

携帯でメールだけ送っておく。

『ケガの具合はどう？ 先生には階段から落ちたっていった。カバン、玄関の前に置いとくね。マユ』

家に帰ると、まっさきにひいばあちゃんの部屋に行く。

ひいばあちゃんは、今日も布団の中で眠ってた。

寝たきりだから。

仕方ないよ、90だもん。

こんなになる前は、冗談好きの元気者だった。

私も、なついてて。

一番の理解者で。

だから、今日も…、家に帰ると、

まっさきにはあちゃんの部屋に行った。

部屋の中は真っ暗で

古い柱時計の音がかちかちいつてる。

足音をひそめて部屋に入り、ばあちゃんの枕元にそっとすわる。

猫のトラが寄って来て、にやんと鳴いた。

私は、トラを膝に乗せ、頭をなでてやった。

トラがガラス玉みたいな目で私を見上げる。

……ばあちゃん、起きないかな？

起きて話を聞いて欲しいな

でも、ここ数日、ずっと眠ったきり。

どうしちゃったんだろう？ 大丈夫かな？

仕方がないから、心で話しかける。

『ばあちゃん、今日、七瀬がまたイジメにあったよ。

でも、私は知ってるくせに、知らないふりちゃった。

…サイターの卑怯ものだよね』

考えたとたんに涙が出て来た。

#2 ダイヤモンド 01

その日。

七瀬が真っ赤に髪を染めてきた。

きつと、髪を黒く染めろっていう

小林達の命令に反抗したんだ。

正直みんなひいてた。

血みたいに真っ赤だし。

「なによ、その色……」

小林ユキが言うと

「似合う？」

と七瀬が笑った。

なんだか小馬鹿にしているみたいで。

「何？ それ！」

と、小林が、怒った。

「気に入らないなら、またボーリヨクにうつたえれば？ 私全然

構わないし」

七瀬は強気だ。

けど、私は憂鬱になる。

また一騒動ありそう。

うんざりする。

そこへ、担任が入って来た。

そして、七瀬の頭髮に気付くと、

「春日さん、その髪はなんでしゅか？」

と、聞いた。

「別に……」

と七瀬。

先生が怒る。

「うちの学校では、髪を染めるのは禁止されていましゅ！」

確かに……

うちの学校は一応『進学校』と呼ばれてて、カラーリングも化粧も禁止だけど、それはタテマエで。

少しくらいはみんなやってるし、センセイも見のがしてくれてる。

けど七瀬は、やりすぎ。

それだけでなく、普段から反抗的すぎ。

だから、フツーなら見逃してもらえるところも、見逃してもらえない。

七瀬も別に気に入ってもらいたいとも思っていないみたいだし。

今も。

七瀬は、立ち上がってこう言った。

「この髪がダメなら、私はもうここには来ません。別にここに来る理由もないし……」

そして、さっさと鞆をまとめると、

「帰ります」

と言って、教室から出て行ってしまった。

「七瀬！」

立ち上がって七瀬を追いかけようとしたけど

「やめろよ」

つて藤井にとめられる。

それで、追いかけるのはやめた。

でも、この日に起きた事はこれだけじゃない。

もっと悲しい事。

#2 ダイヤモンド 02

ひいばあちゃんが死んだ。

眠るように死んだって。

私が帰った時には、白い布が顔にかぶせられてた、

その布を取ると、ばあちゃんは笑っているような顔で目を閉じていた。

不思議な程悲しくない。

多分、信じたくなかったのだと思う。

#2 ダイヤモンド 03

次の日の土曜日の午後。

おばあちゃんの遺品の整理をした。

着物とか、びいどろとか。

ロマンチックで綺麗なもののばかり。

その中に小さなアンティークな宝石箱があつて。

その中には薄いピンクの封筒と、ピンクのダイヤのペンダントが入っていた。

珍しい。

ピンクのダイヤなんて。

でも、綺麗。

すごく光ってる。

それから、手紙を見て

「あれ？」

って思う。

だって、手紙のあて名が私だったから。

なんで？

なんで、私あてなの？

とりあえず、読んでみる。

『麻由香へ

この手紙を読む頃、きつとばあちゃんは、この世にはいないだろう。

死ぬのはそんなに恐くないけど麻由香が心配だよ。

麻由香は寂しがりだから、おばあちゃんがいないと心細いだろうね

でも、人間はみんな、いつかは一人で生きなきゃいけない。

だから麻由香も

心を強くして、生き抜くんだよ。

それから、一緒に入れておいたペンダントは、約束だから麻由香にあげる。

ばあちゃんの形見だから大事にしてね』

そこまで読んで、涙がでて来た。

やっと実感がわいたから。

ばあちゃんに、二度とあえないって。

私は心の中ではあちゃんに言った。

『さようなら、おばあちゃん。』

いつも、マユカを助けてくれてありがとう………』

#2 ダイヤモンド 04

ゴールデンウィークあけ。

久しぶりの登校日。

朝、駅の改札口で七瀬に会った。

「一緒に行こ」

めずらしい。

七瀬から声をかけてくるなんて……。

でも、それよりもっと驚いたのは

「その髪、何？」

七瀬の髪が、真っ黒になってる。

「血の色、やめたの？」

「やめたよ」

「なんで？」

「知りあいに怒られた」

「知り合い？だれ？」

「うん。まあ、つまんないトモダチ」

そんなのいるんだ。

「でも、なんで、黒なの？」

「学校で上手くやってくための第一歩…みたいなの？」

「上手く？」

びっくりする。

「小林にしたがうって事？」

「まあね」

「どうしたの？ その改心」

「その、つまんないツレがさ、もっとオトナにならなきゃだめって」

「何？ その影響力」

「うん。まあ、相手もオトナだし」

「へえ」

意外。

しかも大人のトモダチ？

ヤバい人とかじゃないよね？

大丈夫だよね？

少なくとも、間違った事いつてないみたいだし。

#2 ダイヤモンド 05

「それより、マユ。大変だったね」

「え？」

「おばあちゃんの事」

「うん。ありがと。でも、もう大分平気」

「お葬式いけなくてごめん」

「いいよ。急だったし」

「本当は、行きたかった。けど、あんな髪だし」

「いいってば。気にしなくって」

「気持ちだけでも嬉しいよ。」

「おもしろい、おばあちゃんだったよね」

「うん」

「マユの家に行くと、色んな話してくれてさ」

「うん。おしゃべりだった」

「イギリス人青年との恋愛話。おぼえてる？」

「え？ そんなんしてくれただけ？」

「してくれたよ。若い頃のおばあちゃんと、イギリスのダイヤモンド青年の話」

「へえー。そんなんあったんだ」

「すごいイケメンで相思相愛だったけど、戦争が起きて彼氏がイギリスに帰っちゃったの」

「切ないね」

「それで、2度と会えないと思った彼は、ピンクダイヤモンドをおばあちゃんに渡したのよ」

「ピンクのダイヤモンド？」

「びっくりする。」

それって、おばあちゃんが私にくれたやつ？

「七瀬、あのピンクダイヤモンドを知っているの？」

「それは、おぼえてるんだ」

「おぼえてるっていうか……」

「あんた、魔法好きだもんね」

「魔法？」

「そうよ。あれ、魔法のダイヤモンドだっていったじゃん」

「おぼえてないよ」

「そうなんだ」

「教えてよ。どんな魔法？」

「その、ピンクのダイヤモンドは、持ち主を幸せにしてくれるってそれだけじゃなくて、持ち主の願いを何でも一つだけ聞いてくれるって」

「うっそだあ」

「ホント、覚えてないんだ。あんた、あんなに欲しがっていたのに……」

「私が？」

「うん。泣いて泣いて、おばあちゃんを困らせた」

ホント、全然おぼえてない。

でも、おもしろいな。

なんでも一つだけ願いをかなえてくれるって……。

#2 ダイヤモンド 06

七瀬と一緒に教室に入ると、騒がしかった教室が、一瞬シーンとなる。

小林と、町田がにらんでる。

なんか、やなカンジ…。

席に着くと、藤井が話しかけてきた。

「どういうことだよ？」

「なにが？」

「あいつ……髪、真っ黒じゃん」

「ああ、七瀬のこと？」

「そう」

「あのコ、今日からマジメになるんだって、だから髪を黒くしたらしいよ」

「マジで？」

藤井はびっくりして 七瀬の方を見た。

#2 ダイヤモンド 07

七瀬は、携帯を見てる。

まわりの反応とか気にならないのかな？

きつと、気にならないんだろうな。

そこへ、葛谷が近付いてく。

ちよつと驚く。

七瀬に話しかける人がいるなんて。

何の用だろう？ って見てると

「春日さん、こないだタワー前にいなかった？」

って言う。

七瀬が「え？」って顔をした。

「知らないけど」

「でも、すごく似た人見たんだけど」

「人ちがいたと思う」

「そうかな？ そっくりだったけど。髪も赤かったし」

「グーゼンよ」

「ホントに？ でも本当にそっくりだったよ」

なんだろう？

何のことだろう？

聞きながら不思議に思う。

#2 ダイヤモンド 08

そこへ、小林がやってきた。

「ちょっと、春日さん」

七瀬を呼ぶ。

「何だよ？」

葛谷が怒った。

「今、俺が春日さんと話してるんだけど……」

けど、小林は葛谷を無視。

七瀬に話しかける。

「春日さん、その髪、なんのつもり？」

七瀬は無言。

しかも、小林を見ようとしなない。

小林にしたがうって言ったのに。

クラスで、うまくやってくって決意したのに。

あんなんで、うまくやる気あるのかな？

こっちがハラハラする。

「無視かよ」

町田綾美が言った。

あのコは、いつも小林の後ろにくっついてる。

「ねえ、春日さん」

もう一度呼ばれ、

七瀬は、ようやく小林を見た。

そして、自分の髪を指して笑った。

「似合う？ あんたとおそろいのカラス色」

小林の顔が強ばる。

かえってムツとさせたみたい。

イヤな予感がした。

#2 ダイヤモンド 09

予感適中。

その日の帰り、

下駄箱から七瀬の靴が無くなっていた。

必死になってさがして

やっと旧校舎の、トイレのゴミ箱の中で見つけた。

真っ黒でグチャグチャになっていた。

履いて帰るのはゼツボー的に無理。

だから、スリッパのまま帰るって。

さすがの七瀬もへこんでた。

でも、むりやり、平気なフリする。

「バツカみたい。小学生並みの嫌がらせじゃん」
て。

強がってるみたい。

でも、

悪いけど、私は少しキビシめに答えた。

「確かに小林さん達は卑怯だよ。でも、七瀬だって悪いと思う。バカにしたりするから…」

「別に、バカにしたおぼえないけど」

「バカにしてたよ。カラス色なんて」

「だって、その通りじゃん」

「でも、あんな言い方ないよ」

「あれが、精一杯の譲歩なんだけど」

「七瀬、本当にみんなとうまくやる気あるの？」

「なんか、どうしても、よくなって来た」

「何？それ。サイテー。協力しようと思ってるのに」

「じゃあ、いいよ。もう。何もしてくれなくても」

「逆ギレするんだ？」

「そうじゃなくて。心配してくれるのはありがたいけど…もういいよ…自分の事は自分でなんとかできるし」

「それって、大きなお世話って事？」

「そうじゃないけど。正直、ちょっと重い……」

「信じられない！」

あまりの悔しさに、涙が出てくる。

「今まで、私がどんな思いで、七瀬のフォローして来たと思ってるの？」

「マユ……」

さすがの七瀬も、普通じゃないって感じたらしい。

「ごめん、そんな傷付けた？」

「もういいよ！」

私は叫んだ。

「明日からもう一切かまわないから、勝手にすれば？」

「マユ……」

七瀬をおきざりにして、走り出す。

最低！ 最悪！

七瀬なんか、もう知らない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8633i/>

NANASE

2010年10月13日12時26分発行